塔里寒考

岩村忍

長春眞人丘處機が、元太祖チンギス・ハーンの招きに應じて西域に旅し、大雪山中に於て太祖に謁して道を說いた經緯は、同行した眞人の門弟李志常の筆になる長春眞人西遊記によって詳しく傳えられているし、その詳細な考證もまた中國側では王國維、西人としては Bretschneider, Waley 等によってなされている。これら先人のお蔭で、元代西域歷史地理の珠玉とも云うべき西遊記を讀むに當って、我々はまず不自由を感じないで濟んでいる。

しかし、西遊記をよく讀んでみると、肝心な箇所に大きなブランクのあることがわかる。西遊記の眼目は、何と云っても、眞人が太祖に謁して道を說いた事實にあるのだが、一體、太祖が眞人を引見したのは、何處であったろうか。この點になると、王國維は勿論のこと、前に擧げた西人たちも一向にはっきりしたことは云っていないのである。

ところで先ず、西遊記によって長春眞人のアム河以南の行程を考えてみよう。

辛巳の歲十二月末(一二二一年二月初旬)、長春眞人は邪米思干(サマルカンド)に於て、太祖が大雪山東南(後段で述べる)に駐している事を聞いたが、當時は雪なお深くして行路が困難なため、しばらく出發を延期し、翌壬午の歲、三月十五日(一二二二年四月二十六日)に至ってサマルカンドを發した。その前に太祖の行宮卽ち大雪山の東南から歸って來った阿里鮮は

春正月十有三日に(サマルカンド)を出發し、三日間馳せて、東南の鐵門を過ぎ、また五日で大河を渡り、二月初吉、東南して大雪山を過ぎた。積雪が甚だ高く、馬上から鞭を擧げて、之を測ったが、なおその半ばに及ばず、下に踏む所のものもまた五尺ばかりであった。南行する

こと三日で行宮に至った。

と、道程について述べている。眞人一行は四日目に碣石城 Kash, サマルカンド南方を過ぎ、鐵門 Kash の南方八五キロ八〇キロの Shar-i-sabz を經て東南行し、高山を越えた。鐵門から直南に下れば、バルフに通ずるアム河渡河點のテルメズに出る。ところが一行はさらに東に進んで險峻な高山を越え、流れに沿って南行して、遂にアム河に達したというのであるから、これはどうしても、テルメズに至る Surkhān 河ではなく、もっと東の Kāfirnighan 河か、若くは Surkhāb 河に沿って下り、Aiwani 渡河點か、もっと可能性のあるのは、おそらくはその東のクンドゥズ河との合流點の渡場である Takht-i-Quwat においてアムを渡河したものと考えなければならない。

さて、眞人一行はアム河から東南行して、夜になり古渠のほとりに泊った。渠の附近には、蘆葦が繁茂し、それは巨大で頗る丈夫である（アシではないという。E. Bretschneider, Mediaeval Researches, I, p. 85, fn. 214 參照）。本文には、ちゃんと東南行とあるし、今述べたように水の豊富な水渠があるというのだから、その日はアム河に沿って東南に進み、河岸に近い地に泊ったに違いない。この後で、長さ三尺、色は青黑の大蜥蜴を見たと記している。この記載は、北使記に蛇有四跗とか、西使記に所產蛇、皆四跗、長五尺餘、首黑身黃、皮如鯊魚、口吐紫焰などあるのに較べて遙かに正確で、この一事を以てしても、李志常の觀察と記述が信賴するに足るものであることがわかる。事實、アム河南方の砂漠地帶では、一メートルに達する大トカゲは屢々見かけるところである。この大トカゲの存在は、眞人一行の道程を知る上に頗る重要である。この種のトカゲや陸龜は、乾燥した砂漠地帶に棲むものなのであるし、東南行したというのだから、これはまさしく最初しばらくの間は、ほゞ正東に向ってアム河に沿って溯り、アム河とその支流 Kunduz 河の合流點から砂漠（この大砂漠は單に dasht（荒地）と呼ばれている）の東邊に沿って流れるクンドゥズ河岸を東南に進んだことに疑いない。そしてテルメズの對岸を發してから六日にして太祖の行在に達した。

眞人一行が行在に着いたのは壬午年四月五日（三月二十九日から四日にして行在に達するとあるを Bretschneider は六日に誤る）すなわち一二二二年五月十六日のことである。太祖のこの行在の所在については、王國維は單に、距阿母河四・五日程と云っているのみである。こ

れは王國維ともあろう學者に似合しからぬ蛇足であろう。アム河を去ること四・五日の行程というだけなら、別に註の必要はあるまい。本文にちやんと書いてある。この點については、西洋の學者たちもまた一言も觸れていない。しかしこの行在の場所をまず確定しておかなければ、これから先きの比定は砂上の樓閣に等しくなる。但しこゝで一言述べておきたいのは、前に阿里薛が南からサマルカンドに還って眞人に報告した中に二太子(察合台)の言として上駐蹕太雪山之東南と見えるが、その後、太祖は北上し、眞人一行は南下し、眞人がアム河を渡った時には、行在はすでにヒンズー・クッシュの北に遷っていたと考えなければならないことである。

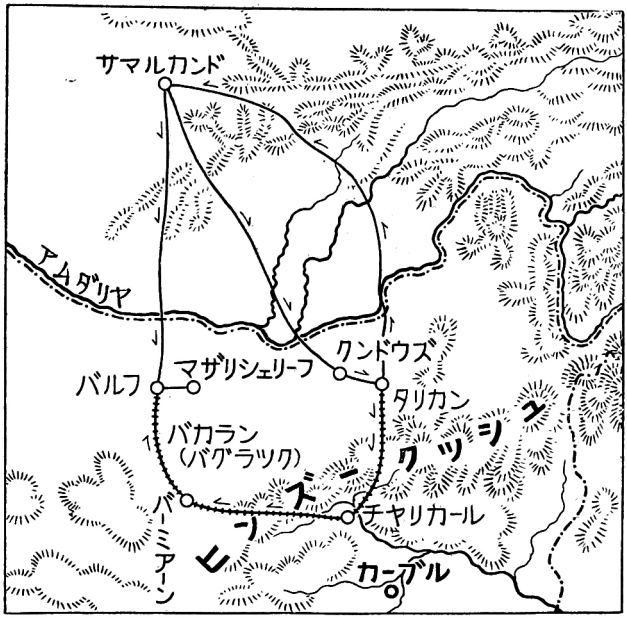
ところが、西洋の學者もこの出發點を飛ばして、すぐにラシードの Perwan を論じている。一方、王國維は本文の時適炎熱、從車駕、廬於雪山、避暑に注して聖武親征錄、癸未夏、上避暑於八魯灣川、錄記太祖征西事、皆後一年、則此實壬午年事、則此雪山、卽八魯灣也、八魯灣川、秘史作八魯灣安客額兒、客額兒、本野甸之義と記している。この注もまた奇妙なものと云わなければならない。王氏は本文の廬於雪山避暑を、いきなり親征錄・癸未の條の夏、上避暑於八魯灣川に結びつけて、早合點しているとしか思えない。また八魯灣川。とし、則此雪山、卽八魯灣也、八魯灣川云々もおかしい。しかしこの點についての私の說明は、後に述べるつもりである。從って王氏は廬於雪山、避暑の事實は癸未であるべきで、壬午ではない、と考えたのである。しかしこの一句を平靜に讀むと、そのどこにも太祖避暑の地が八魯灣でなければならぬという議論は出てこないのである。暑を避ける地が、何故八魯灣に限定されなければならぬか。アム河以南には、何も遠く八魯灣(この土地の比定は後段で述べる)まで行かなくてもいくらでもあるではないか。その上、四月五日に行在に到着して「館舍が定まった」後、直ちにヒンズー・クッシュの南側まで遠路を旅して、四月十四日にはすでに問道の事があったとは、腑に落ちない。八魯灣については後に詳しく考えるが、とにかくヒンズー・クッシュの南側にあることは疑いなく、それはアム河の東南數日の行程にあった行在から數百キロの遠隔の地にある。またその途中は東の Khawak 峠を通るにせよ、西の Aq Robat 峠又は Nil 峠を越えるにせよ、いずれも三〇〇〇メートル

を遙かに突破する險峻難路を通過しなければならぬ。しかも、ヒンズー・クッシュ北麓にあったと推定される行在の背後には、幾多の好適な yeilaq すなわち避暑地があるにおいてをや、である。何を苦んで、この雪山を八魯灣に比定しなければならなかったのだろうか。

肝心な行在の位置の問題に短刀直入に觸れないで、その周邊をいつまでもめぐっているようだが、もうすこし我慢していただきたい。

一體にヒンズー・クッシュという山脈は、その南側は北インドから徐々に高くなっているのだが、北側は極めて突然低くなっているのである。東のバダクシャンや西の Koh-i-Baba の四—五〇〇〇メートル級の高峯から、海拔わずか三〇〇メートルのトルキスタン草原まで直線距離にしては一五〇キロとないのである。從ってエイラック、すなわち夏の牧地、換言すれば避暑地は、北側の麓からそう遠くない所にいくらもある。例えば、アム河の南の支流で Kāfiristan (Nuristan) の高山に源を發する Kunduz 河に沿って五〇餘キロも溯ると、アム河南岸の酷暑炎熱、水の惡い平原地帶とは打って變った清冷な Talikan のような高原があるではないか。

こゝでとう〳〵タリカンという名前が出てきた。そしてもう一度、元史や親征錄を見なおすと、共に壬午年の條に



太祖の道程（一二二二年）
——長春眞人の道程（一二二二年）

はちやんと、元史には夏、避暑塔里寒寨と見え、親征錄には是夏、避暑於塔里寒高原と出ているではないか。そこでもう一つ説明を加えておく必要があろう。假りに西遊錄の廬於雪山、避暑が元史、親征錄の避暑塔里寒に相い應するものと考えるとして、さてそれは果して雪山といえるかと云う點である。これは、もしタリカンを雪山といえないとすると、パールワーンもまた雪山と云えない、ということで答えられる。後に述べる如くパールワーンは背後に、夏も雪を戴く高山をめぐらしているが、エイラックそのものは勿論そんな五〇〇〇メートルもある高所ではない。タリカンと雖も同様で、その南にはカーフィリスタンの雪山を望むが、それ自身は一〇〇〇メートル以下の高原に過ぎない。

これで、太祖が壬午年の初夏にも高地に暑を避けたが、それは癸未年の八魯灣とは全く別の所であったことがわかる。であるから西遊記の廬於雪山、避暑は一應タリカンであったと、素直に考える方がよろしい。そして、このように考えると、右の句に直ぐ續く上約四月十四日、問道から以下の本文の説明にもよく適合する。この説明は後段で詳しく述べることにしたいが、その前にタリカンの地名についてすこし觸れておく。

タリカンについてはブレットシュナイダー（前揭書、下卷九七―九九頁）が詳しく述べ、那珂通世博士（校正增注元親征錄）もまたこれに基いて長々と記されているが、要はタリカンという地名が蒙古征西の地域内に數ケ所あるが、いま問題にしている塔里寒はマルコ・ポーロの云うTaicanだということである。この際、その他のタリカンは全然問題にならない。ついでに、中央アジア、イランには同名の地が特に多いことを注意しておきたい。王國維はサマルカンドに於て阿里鮮が太祖の陣營から歸來して眞人に會い、二月初吉、東南過大雪山、積雪甚高、馬上擧鞭測之、猶未及其半、下所踏者復五尺許、南行三日、至行宮矣と報じた記事に注して、この行宮は塔里寒だとしている。曰く

阿里鮮於渡阿母河後、十四日至行宮、案此行宮、蓋辛巳年避暑之塔里寒寨、馬哥波羅紀行、謂塔里寒、距班勒紇十二日程、而自河橋至班勒紇不及一日程、則自阿母河至塔里寒、當得十三日程、阿里鮮行十四日者、或因積雪難行故也、至長春四月中所至之行宮、則渡河後五日卽達、非阿里鮮正月中所至者矣

塔里寨をマルコ・ポーロのタイカンに比定しているのはよいが、行程の推定は全然誤っている。王氏は、眞人が此の年、秋に再びアム河を渡ってバルフに至った記事である泝河、東南行三十里、乃無水、卽夜行、過班里城によってアム河とバルフ間の距離を一日としているが、この間の距離は最短の直線距離で六〇キロはある。バルフからマルコ・ポーロの所謂タイカンすなわち現在のクンドツ（この比定については後述する）までは直線距離で一八〇キロ、假りにタイカンを現在のタリカン村としても二四〇キロであり、マルコはこの距離を行くに十二日を要しているから、前者では日に一五キロ、後者では二〇キロになる。この事實から考えれば、王氏がアム河、バルフ間を一日行程としたのは全く當らない。眞人が壬午の春に最初にアム河を渡ったのは、同河とクンドツ河の合流點附近であったが、二度目卽ち秋には恐らく西方のテルメズ或はもっと西に寄った地點であったであろう。從って王氏が、眞人の春の行程はアム河から行在まで五日（或は六日）しか要しなかったのに、秋には十三日を要しているから、春の行在はタリカンではない、と主張しているのは明かに誤りである。後に述べるように、秋の行在は、おそらくバルフ以東、今の Mazar-i-sharif 附近であったろうと思われる。

さて、現在のタリカンという村、或は小さい町は、クンドツから同名の河に沿って東へ五八キロの點にある。しかしタリカンというのは、獨りこの村の名前ばかりではなく、クンドツ河の南方一帶の地域の名稱でもある。タリカン村はクンドツ河の右岸に沿い、北には低い山脈が連らなり、南には夏もなお白雪を戴くバタクシャンの高山を望み、東西は河岸に沿う高原に位置し、高燥にして河岸にはポプラが繁った仲々美しい所である。ところが、この附近一帶には大規模な遺跡（一九五四年の私の實地踏査による）は存在しない。從って蒙古兵が數ケ月にわたって包圍の後、ようやく攻略したという塔里寨寨は、現在のタリカン村、或はその附近であるとは考えられない。それで元史、親征錄の塔里寒寨は何處かというと、私の考えでは、それはどうも現在のクンドツではないかと思われる。

クンドツはクンドツ河の東岸にあり、西に山を背おい、水利に惠まれたかなり大きな所である。この町の背後には欝叢たる森林があり、そこには鹿や豹や猪が今なお横行し、

かつては虎も棲んでいたそうである。しかし現在の町そのものは新しく、この二十年來、附近で綿花が栽培され始め、小規模な紡績工場が建設されてから急に膨張したものである。土地の傳承によれば、この地には昔繁榮した町があったが、チンギス・ハーンによって破壞されて以來、永い間廢墟と化し、野獸とマラリヤ病が多く、アフガニスタンには「死にたければ、クンドツに行け」という諺があるぐらいだった。事實、現在の町に接して、深い壕をめぐらした巨大な廢墟がある。この廢墟はバルフのそれに較べると、すこし小さいが、私がアフガニスタンで見た廢墟の中ではバルフに次ぐ規模のものであった。土地の者は、これがチンギス・ハーンによって滅却された城址であると說明している。

クンドツは昔はタリカンと云っていたかも知れない。いや、その可能性は大きい。クンドツという名前も新しい名前であるから、おそらく昔はタリカン地方の中心がこゝにあり、その城寨すなわち今のクンドツの廢墟がタリカンといわれていたのが、蒙古兵に破壞されて後、この名前が現在のタリカン村に移ったものではなかろうか。クンドツならば、大きな城市が成立し得る自然的條件が備わっている。すなわち水利によく、附近には廣い耕地があり、大森林地帶を控え、加うるにトルキスタンからバダクシャンに入る門戸に當っている。これに反してタリカン村は、決して左様に大きな城市が存在していたと思われるような土地ではない。

また、西遊錄には、明かに眞人が最初に到着した時には、時四月五日也、館舍定、卽入見と見え、次いで時適炎熱、從駕、廬於雪山避暑と書き別けられている。館舍とあるからには、城市を想起せざるを得ない。廬とある以上は、人家のすくない山地であろう。壬午年四月十五日は五月十六日に當たる。五月中旬にはすでにクンドツでは氣温は三〇—三五度に昇る。クンドツは標高三九六メートルであるが、タリカンはそれから二・三百メートルは高い。私も初夏の候にクンドツの暑熱に惱まされたが、タリカンにくると、大氣は清冷で、時に驟雨があり、蘇える思いがした。壬午年の夏、太祖がクンドツ或はその他どこかトルキスタンの低地平原に行在を設けていたとすれば、避暑地を選ぶに當って、近いタリカン高原を顧みず、何を苦んで險峻な山脈

を越えて、數百キロの遠きにある八魯灣すなわちパールワーンに出かける必要があったろうか。

さらに一つ傍證を附け加えよう。トルキスタンの遊牧民の間には transhumance が行われている。すなわち彼等は毎年二回牧地を變えるのである。暑い時候は、高い山地の牧地 yeilaq で過ごし、寒い間は低地平原或は溪谷の牧地 qishlaq で暮す。アム河以南のトルキスタン遊牧民のエイラックは主としてバダクシャン高原であって、ヒンズー・クッシュ分水嶺を越えて山脈の南側に行くことはない。反對に南麓低地の遊牧民も北側にエイラックを持っている部族はない。パールワーンが分水嶺以南にあることには疑問の餘地がない。蒙古兵も本質的には遊牧民であるから、トルキスタンにあってはトランスヒューマンスを行っていたに違いない。太祖が夏に避暑したというのも、實はこれによるものであったろう。そうすれば、トルキスタンにいる間は、トルキスタン遊牧民のエイラックを使用するのは當然のことであり、また最も便宜であったに相違ない。もしそうだとすれば、アム河南岸の遊牧民のエイラックはバダクシャンであるから、おそらくは太祖とその麾下もまたタリカン高原方面のエイラックを求めたと考えるのは、極めて理に適っているのではあるまいか。

少々しつこいようであるが、最後に壬午年の避暑地が八魯灣であり得ない決定的な證據を擧げよう。

眞人が太祖の行宮すなわちクンドツに到着したのは、四月四日であり、太祖が問道の日と定めたのは四月十四日である。そうすれば、太祖と眞人は十四日以前には必ず避暑地に到着していなければならない。すなわち避暑地までの旅行日數は最大一〇日間ということになる。八魯灣すなわちパールワーンがヒンズークッシュ南側の Ghorband 溪谷のどこかであることには疑問の餘地がないのであるから、クンドツから最も近い Charikar 附近と假定するとして、そこに至るまでに幾日を要するであろうか。

クンドツから Shibar 峠を經由してチャリカールに至る現在の道路の延長は四五〇キロであり、最短經路である Khawak 峠經由では二五〇キロになる。それで、前の例にならって一日の平均行程を二〇キロとすれば、シルバ越えでは二十日以上を要することになる。これでは問題にならない。假りにハワック越えとしても十二・三日はかゝる。

ところが、一日二〇キロというのは、バルフからクンドゥまでの平原の行程である。ハワック峠はヒンズー・クッシュ越え中の最難の峠といわれ、五〇〇〇メートル以上の高峯が聳える地方である。従って、ハワック越えでも最少十二・三日は要するとすれば、クンドゥに限らず、トルキスタンの何處からでも、十日以内でゴールバンド溪谷に達することは不可能である。とにかく十日間でのヒンズー・クッシュ越えということは、普通の狀態では考えられないことなのである。壬午年の太祖の避暑地を八魯灣だとする如きは、實はたゞこの一事からしてさえも不可能なのである。

以上のような事實から、西遊記に見える壬午年春の太祖の行宮は、現在のクンドゥにあり、これが當時のタリカン、元史や親征錄の塔里寒寨に當り、長春眞人が車駕に從って行った避暑地こそ現在のタリカン高原ではないかと考えられるのである。現に親征錄には、圍守塔里寒寨。辛巳年避暑於塔里寒高原。壬午年と二つを使いわけられており、またペルシヤ史家によったドーソンによれば、タリカン山間地方の城寨 la forteresse de Noussret-couh dans le canton montagneux de Talécan (d'Ohsson, Histoire des Mongols. t. I, p. 273) は七ケ月にわたって蒙古兵の攻圍を支えたとしている。これによってもタリカンの城寨とタリカン地方とは別個に考えらるべきことが明かであろう。さらにマルコ・ポーロによると、タリカンは美しい町で、穀物とバダクシャン產の岩鹽の集散地で、その南には大山脈を背い、ハタンキョウとピスタシオの樹林が多いとされている。この記事はまさにクンドゥにぴったり當て嵌ると云ってよい。

以上のような事實から、太祖征西時代のタリカンは、やはり地方名で、その中心に城寨と町があり、この中心地も同じくタリカンと呼ばれていたものと考えざるを得ない。そして同時に、壬午年の太祖の夏の行在が塔里寒高原で、八魯灣ではあり得ないことが明かになったと思う。從って長春眞人はヒンズー・クッシュの北麓に止まり、山脈中に深くは入らなかったことになる。

太祖は四月十四日を以て問道の日と決めたが、回紇の叛亂が起ったので、親征することゝなり、十月吉を以て改めて問道の時と定めた。そこで長春眞人は一旦サマルカンドに歸ることになった。この歸途に關する李志常の記述は頗る簡單で、加うるに方向も月日も記載がない。從って眞人

の歸途を比定することは困難を極める。このような記事から道程を推定することは、大膽極まることで、寧ろやめた方がよいかも知れない。しかし眞人の歸路を考えることは同時に、壬午年の太祖の夏の行宮の所在に關する一つの傍證とならぬでもないので、一應考えてみよう。

眞人は四月十七日(一二二二年四月二十八日)タリカンを發し、回紇千騎に護衛されて歸途についたが、「他路に由って回る」とあるから、往路とは異った路をとったわけである。ところが、それからサマルカンドに歸着までの間の記事には、道途の簡單な記述のみで、たゞ一つの地名も、方向も全然記されてはおらぬ。他の箇所では、かなり詳細であり、正確である李志常の筆が、何故こゝでは、そうも簡略なのであろうか。これが第一の不思議である。とにかく、こゝで知り得ることは、歸途はおそろしく險阻な高山地帶を過ぎ、狹い絕壁に圍まれた急流に沿って進んだことだけである。ところが、こゝに記載されているような自然景觀は、中央アジアの高山地帶ならば、どこにでも見られるところで、これだけからでは到底比定はできない。

そこで、これまで考えてきた壬午年行宮パールワーン説とタリカン説に當て嵌めて吟味してみよう。長春眞人がパールワーンを出發してサマルカンドに向ったとすると、東の Khawak 峠か、中央の Bulola 峽谷か、西の Aq Robat 峠か Nil 峠の中の一つを經て、ほゞ直北に進んだことになる。ところが、この場合に都合の惡いのは、第一に距離の點である。行在からサマルカンドまで眞人一行は二十日を要している。ところが、ゴールバンド溪谷からサマルカンドまでの直線距離は六〇〇キロを越え、實際の距離はおそらくその三割以上長いであろう。そうすると、どう考えても最低三〇—四〇日はかかる。眞人の詩に水北鐵門猶自可、水南石峽太堪驚とあって、アム河の北の鐵門と南の石峽とを對せしめているが、ヒンズー・クッシュ中央部の山峽を河南というのは、そのアム河との距離から見て餘り適當ではない。しかしこの點は詩人の形容として無視してもさしつかえはない。それよりもパールワーン説の障害になるのは、中部ヒンズー・クッシュから北流する河には、こゝの記事に見えるような大河がないと思われることである。たゞし私も全部を踏査しているわけではないから、これも斷言はしないでおく。最後に一つ附け加えておきた

いことは、もしパールワーンから出發したとすれば、サマルカンドまでの間には、必ずアフガン・トルキスタン中のどこかのオアシス都市、すなわち東から Tash-khurghan, Balkh, Aqcha, Shibarghan, Andhui の中の一つは通過しなければならぬのに、さきに述べたように、一行は殆ど町や都市は一つも經過せず、山中のみを進んだように思われる。

これで大體、パールワーン説を採り得ないことは明白であると考えられる。それならタリカンを出發して「他路に由って回」った場合はどうなるか。

タリカンから北北東に向うと、パミールの東邊を通過し、アム河上流以南に於ても四—五〇〇〇メートルの高山地帶が延々と連らなっており、アム河に注ぐ急流はいくつも深い峽谷を貫いて流れる。アム河の上流を渡ってさらに北上すれば、ザラフシャン高原に達し、西流する同名の河に沿って下るとサマルカンドに出る。この道程は、悉く頗る高度の高い山地を行くので、その間には殆どこれと云うほどの町はない。またこの寧ろ迂回したルートによるタリカン、サマルカンド間の距離は、四五〇キロで、二〇日間前後で到着できる。

さて、眞人がサマルカンドに向けてタリカンを出發した前後に、太祖もまた回紇山賊を親征するために行在を發したが、この年八月二十二日(九月二十八日)に太祖と眞人が再び會するまでの間の太祖の行動は、中國側にも西史にも傳えられていない。

こゝで考えなければならぬのは、那珂博士が指摘している太祖西征の紀年に關する諸史の誤謬或は錯亂である。博士校正增注親征錄成吉思汗實錄は太祖西征の紀年は、元史、親征錄、時には西史も、これを一年後に記しているとしている。私はこの點、那珂博士が正しいと考えるが、全部の記事が全部、一年おくれになっているわけではなく、むしろ記事に錯亂があると見なす方が正しいのではあるまいかと考えている。但しこの問題に關しては、こゝで詳細に論ずることはできないので、稿を改めて説くことにし、以下簡單に觸れたい。すくなくとも壬午(太祖十七年、一二二二年、回曆六一九年)とその翌年癸未の太祖の行動に關しては、西遊記が最も信頼するに足ることは明かである。その理由は云うまでもなく、西遊記は、太祖に謁した人の直接的記錄であるこ

と、共に、西遊記の紀年は辛巳(一二二一年)の日蝕の記事によって間違いないものと考えられるからである。Bretschneider, I, p. 51 参照

しかし西遊記では、壬午年の夏、太祖が眞人とタリカンのエイラックで別れてから、どの方向に向ったかはわからない。だが他の史料と比較することによって、見當つけられないことはない。そこで親征錄、元史、ペルシア史家によったドーソンのこの兩年の主な記事を左に摘出してみよう。

一二二二年

親征錄

塔里寒寨を攻む。夏、塔里寒高原に避暑す。札蘭丁(ジャラル・ウッディン)遁走し、忽都忽(クトク)追撃したが、却って敗らる(パールワーンの戰)。太祖、塔里寒寨から救援に赴き、札蘭丁を敗り、追って辛自速(インダス)河に至る。

元史

塔里寒寨を拔き、暑をこゝに避く。札蘭丁逃ぐるを忽都忽追って敗れ、太祖親征す。

ドーソン

ジャラル・ウッディンを追ってインダス右岸に至り、春に及び、酷暑に會い、パールワーンに引き返し、その占領せる都城にダロガ(達魯花赤)を置く。

一二二三年

親征錄

太祖、インダス河から北に師を還し、カーブル盆地を越えて、夏に八魯灣川(パールワーン)に避暑し、達魯花赤を各城に置く。

元史

夏、八魯灣川に避暑し、西域諸城に達魯花赤を置く。

ドーソン

インドからパールワーンに至り、バーミアーンの山を越え、夏、Bacalan に駐營し、ついで北上、バルフを過ぎ、アム河を渡り、冬はサマルカンド附近に駐す。

右に擧げた記事には、明かに錯亂がある。親征錄、元史、ドーソン共に一二二二年の記事は、一年繰り上げられなければならない。太祖が忽都忽の敗戰の報を聞いてジャラル・ウッディンを追撃して北インドまで打ち入ったのは、

前年の一二二一年でなければならぬ。何故かと云うと、阿里蘇は一二二二年三月に大雪山を越えて南に三日行程、すなわちカーブル盆地で太祖の行宮に到っており、眞人は五月に太祖にたぶんタリカンで謁しているからである。同じ年の春にジャラル・ウッディンを追撃して北インドに入り、さらに北歸して三月中にカーブル盆地、五月にタリカンに行在を置くことはあり得ない。また太祖が北インドから北歸したのは、酷暑によるというから夏のことでなければならない。

つぎに一二二三年の記事で見ると、三史共にパールワーンに避暑したことになっており、達魯花赤後述するを置いたのも同年である。パールワーン避暑の記事だけ見ると、三史が一致しているので、紀年を一年繰り上げて西遊記にある壬午の年、長春眞人と共に太祖が避暑したのはパールワーンだと考えられないこともない。しかし前述のように、長春眞人の行程から見て、太祖に謁した避暑地はタリカン高原であると考える方が正しい。

そこで、壬午年すなわち一二二二年夏、眞人と會った後に、太祖が回紇の叛徒を征伐に行ったのは、どこかということになる。いま述べたように、この両年の記事には錯亂があるので、一二二二年五月、太祖が親征したのは、ヒンズー・クッシュを越えたカーブル盆地附近で叛徒を平げて後、前年にならいパールワーンに避暑し、ついでドーソン（前掲書、巻一、三一九頁）に云う Bacalan 地方に移り、秋に至ってこれらのエイラックを降って、ヒンズー・クッシュの北麓に至り、再びサマルカンドより來れる長春眞人を引見したものであろう。右の推定を根據づけるためには、パールワーン、バカランを比定し、つぎに太祖、眞人の第二次會見の場所を決定しなければならない。

まずパールワーンについてはブレットシュナイダー（前掲書、上巻二八三頁）が考えているが、多分に疑問の餘地を殘している。すなわち、或はカーブル盆地の北端 Charikar、又はバーミアーン附近と云い、決定しかねているように思われる。パールワーンという地名は、地圖上ではこの邊に、ちょい〳〵見かける地名である。カーブルの北、チャリカール附近にもあり、これは Benedict Goës Cathay and the Way Thither, Vol. IV, p. 257. の紀行に屢々出てくる。ユールはこれに注してカーブルの北方 Anderab 附近の險峻な峽谷

だといっている。またその附近に同名の村があり、前掲書の地圖では、現在 Baian といわれている村が Baruan と記されている。しかし太祖避暑の地としての八魯灣は、ジャラル・ウッディンが忽都忽を破った地と考えられるし、そうすればパールワーンはヒンズークッシュ山中の高原でなければならない。ドーソンによれば、このパールワーンはバーミアーン附近の平原とされている。バイヤンからバーミアーンまでは一七〇キロもあるし、地形は全く異っている。この二つを一緒にすることは不可能である。私の見るところでは、Baian のパールワーンは、この邊の他の地名の如く、偶々バーミアーン附近のそれと同一の名を有したに過ぎなく、大規模な戰場ともなり得ないし、相當の大兵を擁する行營の地などゝしても不適當である。

このパールワーンの比定は、那珂、王、ブレットシュナイダー、ユール、ウェーレーなど諸氏が何とか云っているが、實は答は頗る簡單なのである。パールワーンと云うのは村や谷や地域の名ばかりではなく、ゴールバンド溪谷に沿うチャリカールから、バーミアーンに近い所までを含む一帶の地域の名稱なのであり、その中には同名の村、谷なども含んでいる。この事實がわかると、あとは忽都忽がジャラル・ウッディンに敗られた場所を捜せばよい。

パールワーンの戰はドーソンに詳しい。一二二一年春、ジャラル・ウッディンはガズニを發して、おそらく Koh-i-baba の高山を越えて、バーミアーン附近に達した。カーブル盆地からゴールバンド溪谷に入る關門チャリカールは、すでに蒙古兵が扼していたし、この方は迂回路であるから、コーイ・ババ越えが選ばれたに違いない。ドーソンによれば忽都忽は三萬の兵を擁して Zabilistan すなわちチャリカール附近の今の Zabul-us-saraj 地方に駐していたが、ジャラル・ウッディンがバーミアーン方面に直行したのを聞き、ゴールバンド溪谷に沿って西に軍を移動させた。その兩軍の會戰がパールワーンで起ったのである。ところが、チャリカールからバーミアーンに至る間を調べてみるに、數萬の大軍が會戰し得るような土地はそうはない。またガズニから最短路を取るとバーミアーン町の東方十數キロのバーミアーン河畔のやゝ開いた高地に出る。ドーソンの記述によると、パールワーンの戰場は土地が浸蝕された路が縱橫に貫いているので、騎馬に不便で、ホラズム軍は徒歩

で戰ったとあるから、このバーミアーン河右岸の凹凸せる高地は、確かにこの記載に合致する。そしてこの高地は現在もバーミアーン地方とパールワーン地方の境になっている。以上の理由で、私は一九二一年のパールワーン戰場、すなわち一二二二年の太祖の避暑の地は、バーミアーン東方十數キロの高地と斷ぜざるを得ない。その上、この高地の西方數キロのバーミアーン河の右岸には、チンギス・ハーンの城といわれる Zohak の巨大な城の廢墟が、今もなお聳えている。

さて、ドーソンによるに、太祖は一二二三年、バーミアーンの山脈を越えて、夏の宿營を Bacalan に定めたとある。太祖はバカランから北行してトルキスタンのバルフに出たことになっている。この記事の直ぐ前には、太祖のインド遠征が述べられており、この遠征を一二二三年に繫けているから、ドーソンのこの部分の記事の紀年は當然一年おくらせるべきで、從って太祖のバカラン經由バルフへの行進もまた一二二二年でなければならない。そうすると、私が前に推定した如く、一二二二年の夏、太祖がタリカンからパールワーンに出て、それから北上してバルフ附近に行營を置いていた時分に、サマルカンドから南下した眞人と第二次會見を行ったということは、さらに確實性を增してくる。

こゝで一應バカランの比定を試みておきたい。バーミアーンから西行し、Aq Robat 或は Nil 峠によって北に折れると、まもなく Baghalak という高原に出る。この高原はトルキスタンのエイラックで、それから直北に進むとバルフ、マザリ・シェリーフ地方に至る。Bacalan はおそらく Baghalak の誤寫であろう。ペルシア語では k と gh とはよく混同されるし、語尾の n(nun) と k(kaf) の文字の形はよく間違えられる。從って Baghalak が Bacalan と誤寫される可能性は頗る多い。以上でパールワーンとバカランの比定は濟んだが、これによって太祖のタリカン出發後の道程の推定も、確實性を加えたものと信ずる。

最後に、太祖と眞人の第二次會見の場所はどこかという問題に觸れよう。眞人はしばらくサマルカンドに滯在した後、壬午年（一二二二年）八月八日（九月十四日）再び南行し、磧石城を過ぎ、鐵門を經由しないで、その西南に出て南下し、アム河を渡った。ところが、そのつぎに泝河、東

南行三十里、乃無水、卽夜行、過班里城とある記事が問題である。こゝに見える「河」はアム河とは考え難い。この邊ではアム河は東南ではなく東に流れており、この大河に「水無」というのもおかしい。またアム河の本流から班里城（バルフ）まで夜行して達することは、殆ど不可能である。これは多分、ヒンズー・クッシュから北流してアム河に入る支流の一であろう。これを溯った後、しばらく陸行してバルフに到ったものと思われる。

バルフからの行程は、明瞭である。朝に出發して、東行すること數十里で、北流する河に達したという。この河はおそらく現在のマザリ・シェリーフ附近を北流する河の一つであろう。この河を越えてまもなく、迎えに來た田鎭海に案内されて行宮に到り、太祖に謁した。このような行程であるならば、太祖と眞人の第二次會見の場所がマザリ・シェリーフ附近であることに疑いを容れぬ。マザリ・シェリーフはバルフの正東二十二キロ、まさに一日行程である。西遊錄に記するこのあたりの日次は、甚だ明かではないので、距離の推定も不確實ではあるが、會見の日が八月二十二日（九月二十八日）であったことは明記されている。その後、太祖は眞人を伴って北上し、アム河を渡り、數箇所に淹留しつゝ十月一日（十一月五日）、サマルカンドの西南三十里の地點に達した。

右の記事から判斷すると、一九二二年秋には太祖はバルフに遠からざる地に居たことは疑う餘地はない。從ってインド遠征を一二二二年とするのは誤りで、この年の夏はヒンズー・クッシュ山中のパールワーン及びバグラックに避夏し、秋になってエイラックを去って山を降り、トルキスタン平原のバルフ附近に到ったものに違いない。親征錄、元史に云う一二二三年、八魯灣に避暑したというのは、一年繰り上げられなければならない。また同時に、ドーソンがバカラン（バグラック）に太祖が避暑したというのも一二二三年ではなく、一二二二年のことであるかも知れない。

こう考えてくれば、一二二二年、夏の始めタリカン高原を發して、ハワック峠を越えてカーブル盆地の叛徒を擊った後、北に歸り、ゴールバンド峽谷に沿って西に向い、パールワーンすなわちバーミアーンの東附近からバグラックに徐々に移動して、このあたりのエイラックで馬を養いつつ、遂にバルフ附近でトルキスタン平原に出たと考えるこ

とができる。以上は、確實な史料が缺け、推定の域を出ないのではあるが、しかし親征錄、元史、ドーソン等に紀年の誤りがあり、最も確實な史料が西遊錄であるとするならば、どうしても右の如く推定する外はないのである。

また、那珂、王兩氏が一二二二年の太祖避暑の地を八魯灣としていることゝ私の說とは、決して兩立しないものではない。たゞ兩氏と私との相違點は、太祖と眞人の第一回會見の場所が、兩氏はパールワーンと云い、私はタリカン高原と考えるのみであって、兩氏は同年秋の第二次會見に至るまでの太祖の行動を明かにしていないのに對し、私はタリカンからハワック峠によってカーブル盆地に出て、さらにゴールバンド、パールワーン、バーミアーン、バグラックによって秋、バルフ附近に達したと考える點にあるに過ぎないのである。たゞ唯一の重大な相違點は、兩氏は長春眞人の足跡がヒンズー・クッシュ山中深く及んだとするに對し、私はこれを否定し、眞人はその北麓に止まったと解することにある。

これで壬午年(一二二二年)の長春眞人の道程並に在來不詳とされていた同年夏秋の太祖の行營の所在も明かになったと思うが、ついでにこの年始めて西域に置かれたダロガについて一言しておきたい。太祖はこの年、パールワーンに行營を設けていた時に、西域の占領地にダロガを置いて行政を掌らしめる命を出した。ダロガは親征錄、元史その他の達魯花赤であり、祕史の荅喝合臣であるが、ペルシヤ史家には daroga として記している。ダロガは現在もなおホラサン地方には dārūgeh という形で殘り、町の警備官、或は村長である A.C.S. Lambton, Landlord and Peasant in Persia, 1953, p. 426. ところが面白いことには、このバーミアーン地方の南に接する Hazarajat の Hazara 族の間に於てもこの言葉は darūgha として殘存し、現在は專ら部落長の意味に使われている S. Iwamura and H. Schurmann, Mongolian. チンギス・ハーンがダルガチ設置の命を發した土地に七百年後の今日もなおその名が殘存しているのは、面白い事實ではないか。

The Shê Institution under the Yuan

Takaoki Inosaki

The shê was a kind of rural organization established by an imperial edict issued in 1270. The shê was an administrative unit consisting of 50 households under a chief who was well grounded on agriculture. The Yuan dynasty adopted the shê policy for reclaiming the devastated land of north China due to the uninterrupted warfare from Chin to Yuan. Under the system the shê chief was charged with duties of reporting migration of the villagers, and increase or decrease of the population, keeping a census register, etc. Prohibition of carrying weapons by the populace was another important objective of the system to prevent popular uprising. It was not only the shê chief but the individual villagers who were obliged to make surveillance over the village. The relative social stability created in this way seems to have contributed to the Yuan's offensive against the Sung.

" T'a-Li-Han "

Shinobu Iwamura

Taoist Ch'ang-ch'un's Travels is one of the best travel stories in China. It is also an extremely important material on the historical geography of Central Asia in the Middle Ages. Emile Bretschneider, Wang Kuo-wei and Arthur Waley have made considerable contributions toward identifications of various place names appearing in the Travels and the routes followed by the Taoist and his followers. It was the late Professor Michiyo Naka who, for the first time, pointed out a confusion in the chronology of Chingis Khan's expeditions into Central Asia and corrected the errors in both Persian and Chinese histories of the time, and the main source he used for this purpose was the Travels. There remain, however,

a few points that have not yet been clarified; the location of T'a-li-han, the place where the Taoist was received in audience by Chingis Khan, etc. The present author tries to identify T'a-li-han not with the present Taliqan but with Kunduz and to prove that Ch'ang-ch'un did never go into or beyond the Hindu-kush.

Religious Factors in the Yellow Cap Rebellion

Kan-ei Akizuki

Without understanding the social and economic background of the closing days of Later Han, it will be difficult to grasp the meaning of the Yellow Caps who played a leading role in disrupting the ancient Chinese Empire. Since the nucleus of the Yellow Caps consisted of the followers of T'ai-p'ing Taoism, this creed will provide the key to elucidate the nature of the great rebellion. The idea has been current that the creed of T'ai-p'ing Taoism was nothing but simple penitence and incantation, which were intended to cure illness. But certainly this was not all. By that time there was already in existence the worship of deified Huang-ti and Lao-tzu who were supposed to confer the believers with longevity and wealth and happiness. This creed, called Huang-Lao-Tao, occupied an important place in T'ai-p'ing Taoism. Participation in mass of the peasants in the rebellion seems largely due to another phase of T'ai-p'ing Taoism, i.e., its charity organizations for helping the poor.